



いきなりでビックリしたわよ

あなたのお父さんから、一日だけ家に戻りたいと申し出があって
今のあなたなら大丈夫だろうと九十九先生も外出を許可してくれたの
ただし、家族以外の人とは接触を持つては駄目よ

エントランスで一人、迎えの車を待ちながら加夏子は恵美子の話をボンヤリと思い返していた。

家族以外の人、ね

誰もかれもおんなじなのに

ありきたりで薄っぺらな言葉に、少し前なら不快感が必ず大爆発していたであろう自分が、こんな所でのんびりとそれを思い出しているのが不思議であった。

過激な情動が影を潜めた分、色々な事がどうでもよくなっていた。

医者も家族も、勝手にやりたいようにやっているだけだ。

そこに自分は居ない。

それが彼女の目に映る周囲の景色であったのだ。

「おね～えちゃん！」

トンツと車椅子の背を叩いたのは碧だった。

「こら、脅かそうなんて10年早いわよ」

「なーんだ、つまんなーい」

紺色のシャツに白いダウンのベストを着た碧が、後ろでニコニコ笑っていた。

自然と笑みが沸いてくる。

不思議なコ…

初めて会った時からスルリと私の心の中に入り込んできた。

でもそれが全然、不快じゃない。

むしろ暖かく懐かしいような感じがして、このコといると笑顔になってしまう。

「おねえちゃん、退院しちゃうの？」

「ウウン、そうじゃないのよ。パパがね、ちょっとだけおうちに帰ってきてって言うてるの。それでね」

「じゃあ、また戻ってくるんだ」

「そう、すぐに」

「じゃあ帰ってきたら、ウチと折り紙しようよっ！ ウチ、カエルが折れるようになったんだよ」

「すごいじゃない、じゃ、約束ね」

左の小指を差し上げた加夏子は、慌てて右手に変えた。
碧の短い髪が、シャツの左袖と一緒に風になびいていた。

エントランスを白いクラウンがこちらに向かってくるのが見えた時、強烈な既視感が加夏子を襲った。
どこかで似たような光景を見た事があると、加夏子は碧の存在すら忘れてその時の事を思いだそうとしていた。

駄目、思い出せない…

「それ、殉にいちゃんの事だよ」

小さな右手を加夏子の肩に添えた碧が言った。

「みーちゃん…あなた…」

加夏子は穴があく程、碧の顔を見つめた。

◇

久しぶりの自分の部屋だった。
明るい木目の机、小さなスタンド、座り慣れた椅子。
淡い花柄の壁紙は入院前と少しも変わっていない。

変わったのはワタシね
それとも、本当のものが見えるようになったのかな
じゃあ何故、今まで判らなかったの
本当のものって何？
ワタシって何？

一階には両親が居る筈であったが、物音は聞こえてこない。
寒さが冷たく締め上げた夜の街は、しんと静まり返っていた。
夕食後、階段の簡易エスカレーターで二階に上がった加夏子を気遣い、母が顔を覗かせたのが2時間ほど前。それからずっと一人きりの部屋でスタンドの灯りを見つめ続けていた。

やる事も、やりたい事も無い

彼女から望んだ帰宅ではなかった。
父のたったの願いで実現した今回の一時帰宅は、加夏子にとって不可解であり鬱陶しくもあった。
あれだけ切望した家族の温もりも今は白々しく感じる。

どうでもいいや
怒り狂うのにも、もう飽きちゃった
ひとりでいられればそれで充分
そう、一人がいい…

荒野にゆきたいと、ふと加夏子は思った。
そこかしこに得体の知れない生き物の骨が転がっているような、草も生えない石ころだらけの荒野。
何の表情も見せない風がただビュウビュウと吹き荒んでいるだけの荒れ野が今の自分には似合っていると、虚ろな目で
乏しいスタンドの光を眺めながら、加夏子はひとつ溜息をついた。

彼女の周囲は皆、大変な間違いを犯していた。
清水加夏子の精神は、決してガードを下げた訳でも回復への緩やかな過程についた訳でもなかったのだ。
加夏子の冷ややかで醒めた眼差しも、いつ飛び出すか判らない暴力も、全てが自分と世界との関わりを見つめ直し再構築しようとする彼女なりの葛藤であり足掻きであったのだ。
他人がどう思おうと、その結果どれ程自分が忌避されようとも、加夏子は壊れてしまった自分と世界との繋がりを手探りしながら必死に探していたのだ。

だがその想いは、碧の出現で足場を失ってしまった。
癒される事は、張りを失う事に等しい。

残されたのは自分自身への果てしない嫌悪感だけ。
加夏子の精神は今、崩壊の危機に晒されていたのだった。

◇

一階で電話が鳴るのが聞こえた。

階段を登る重い足音がすると、ドアをノックして恒彦が顔を出した。

「カナ、電話だぞ。堀川君から」

「え…」

電話の子機を渡すと、恒彦は部屋に入らずドアを閉めた。

加夏子は車椅子のホイールを押して窓際まで進むと、おずおずとそれを耳に当てた。

「もし…もし？」

「やあ」

彼女とは対照的に屈託無く響く声。

「ヤアって…こんな時間になに？」

「チョット、ね。話があるんだ」

「ワタシにはないよ、別に」

戸惑いながらも、加夏子は拒否の態度を崩さなかった。

「明日、会えないかな」

「明日は病院に戻るの。他にやる事も無いけど、わざわざあなたに会いに行く理由も無い」

「君は僕と会わなきゃならない、会って、ちゃんと話をしなきゃならない。君自身の為に」

「ワタシのため？ なにそれ、あなた何様のつもり？！ なにしようっての！」

「何もしない、何もしないよ。でも君は知らなきゃならないんだ、あの夜、自分に何が起きたのかを」

「そんな必要ない、あなたは助けてくれたかも知れない、けどそれだけじゃない！ あなたはワタシに何かした、お得意の心を覗くいやらしい力で。そうよ…あなたは私を汚した！ 誰も来ない、誰の邪魔も入らない暗い洞穴みたいな場所で、あなたはワタシを犯したの！ カラダも心も覚えてる！ 虫酸が走るのよ！」

「聞いてくれカナちゃん」

「気安く呼ばないで！ 言ったでしょう、ワタシに近づかないでって！！」

叫ぶように言うと、加夏子は電話を切った。

荒い呼吸を整え子機を膝に置き、薄いカーテンに覆われた窓を暫くの間ボンヤリと眺めていた。

ふと何かを感じてカーテンをめくってみる。

二階から見下ろす道路の街灯が、細い影を作っていた。

殉

ゆっくりと手を持ち上げる彼を、路面の影が真似る。

また電話が鳴った。

「…いたんだ、ずっと、そこに」

「みーちゃんが言った。おねえちゃん、淋しいんだよって。同じなんだ、あの子と僕は」

「おなじ…」

「あの子にも聞こえたんだよ、カナちゃんの『声』が」

「それじゃあワタシ」

「みーちゃんの気持ちが届くなら、僕だって。大丈夫だから」

行くよと言って、殉は携帯を切った。

部屋の外で聞いていた恒彦が、足音を潜ませて階段を降りていった。